

研究経過報告

河合優年

一年がこれほど短く感じられた年は、今までになかったように思われる。一昨年の留学時以上に短く感じられた。それに見合って内容が充実していたかは疑問であるが、とにかくあっという間に過ぎてしまった感がある。そのような一年の経過を述べることにする。

1) 研究活動

本年4月にボルチモア（アメリカ・メリーランド）で開催されたSRC Dにおいてパデュー大学のA. フォーゲル先生らとの共同研究である「母子相互作用の日米比較研究」を発表した。また、7月には東京で開催されたISSBDにおいて、「乳幼児の四肢運動の統合」についての発表を行った。さらにシンポジウムでのパネラーとして「三ヶ月児における片側刺激による表出系の抑制」について発表した。研究論文としては、「リーチング行動の発達的变化に関する研究」がリサーチに、また「触覚による異同判断の発達的变化」が発達障害研究にそれぞれ掲載される。「母子相互作用の日米比較」は、現在チャイルド・デベロップメントに投稿中である。

2) その他の研究報告

自分自身の研究領域と直接関係はないが、米国滞在中に観察した子どもの様子をまとめた、「幼児の異文化における適応」という論文を、梶田・安彦先生による「帰国子女・留学生の適応教育に関する調査研究報告」に載せていただいた。

3) 共同研究・試験研究

現在の所、3つの共同研究を行っている。一つは、A.

フォーゲル先生と行っている、「日米における母子相互作用」についてのものである。次年度以降、さらに韓国を含めた研究に発展させる予定である。第二のものは、三年前に始めた「きょうだい研究」である。これは、小嶋秀夫・山田洋子・村上京子の先生方と行っているものであり、科研費を得て現在追跡研究の準備中である。三つ目は、教育学科の森下一期先生と行っている、「手操作の発達の研究」である。これは、自分の行っている運動発達の研究を、もう少し実生活と関係付けてみようとしているものである。現在、生活の中での手の使用と器用さ、および技能について分析を進めている。

試験研究として、電気通信普及財団よりの援助を得て、コンピュータを使った国際間通信に関する研究を行っている。これは、マイクロ・コンピュータと電話回線を使って国外と通信しようとするものである。将来的には、この方法を使って、外国における意識調査や実体調査を計画している。現在は、試験段階としてこの方法を使ってA. フォーゲル博士との研究に関する議論を行っている。

4) その他

本年度に入って、幾つかの本に執筆させていただく機会を得た。心理学の教科書が二つ（福村出版・名大出版）専門書が一つ（金子書房）、一般書が一つ（有斐閣）であった。今まで、本など一度も書いた事の無かったものが、見よう身まねで書いたものであり、恥ずかしく思う事ばかりであったが、非常に勉強になった。

研究経過報告

村上隆

1. 多集合データの解析

昨年のこの欄で予告した、合成変量導出型の方法の定式化に努め、その成果は、「2次合成変量のアルファ係数の和を最大化する多集合データの階層的な主成分分析

I 経営行動科学, 2, 37-47」および、「複数の変数

集合の主成分と正準変量 名古屋大学教育当部紀要—教育心理学科—, 34 (本巻)」として刊行できた。前者の続編は、間もなく経営行動科学誌上に現れるはずであり、更に、共同研究によるアプリケーション論文を準備中である。アプリケーションの世界から次々に新たな